

## 記念号に寄せて

猪城, 博之

<https://doi.org/10.15017/1398245>

---

出版情報 : 哲学論文集. 25, pp.279-281, 1989-12-25. 九州大学哲学会  
バージョン :  
権利関係 :



## 記念号に寄せて

猪城博之

歴史の観方は人さまざまであろうが、明治以降の日本の歴史で、昭和二十年の終戦が大きな節目であったことは誰しも認めるであろう。そして、少くとも日本の大学に関係するものにとつて、昭和四十二年以降の所謂大学紛争が、戦後における大きな事件であったことも、異論は少いであろう。日本の各大学は何れもこの大小二つの歴史の波に大きく洗われたとは言え、九州大学哲学科の場合は、その波をもろに受けたと言つてよいように思われる。

記念号に寄せて

私が九州帝国大学法文学部（哲学専攻）に入学したのは昭和十七年四月で、入学後間もなく哲学・倫理学科合同の新入生歓迎会があったが、先生方は哲学主任教授の四宮兼之先生、助教の田中晃先生、倫理学の新開長英先生、それに助手の山高さん（のちの福岡教育大学教授）と当時美学の研究室に居られた習田さん（のちに本学教養部教授）とそれに永野さん（のちの

広島大学教授）で、学生は上級生数名と新入生は竹内君（奈良の天理市の出身で、戦後大阪の新聞社に勤務して居られたが、盲腸炎から腹膜炎を併発し夭折された）と私との二人だけだった。哲学科創設時の鹿子木員信先生はすでに亡くなられ、倫理学の大島直治先生も退官されていた。

また中島慎一先生は病氣療養中とのことで、お会い出来ないまま、その後間もなく亡くなられた。この中島先生のごことは、哲学科の先輩で当時小倉の歯科医専に勤めて居られ、あとで奈良の元興寺の住職になられた辻村泰円さんから、そのお人柄を、学生を可愛がつて下さる、親しみ易い先生であったと、よく聞かされた。

四宮先生の御専攻はたしかコーヘン哲学とお聞きしていたが、その西洋近世哲学史の講義は、ドイツ流の講義ノートを音吐朗々と読み上げられる名調子で、学生の間ではだからオントロ

ギーと言うのだと囁かれていた。演習はヘーゲルの精神現象学とカントの実践理性批判だった。

田中晃先生はいかにも少壮気鋭の助教という感じで、いつもお元氣なその独自の哲学を語られる講義だったが、講義や演習のあとではよく学生を近くの喫茶店に誘って下さった。

新開長英先生からはヘーゲルの歴史哲学の演習を受けたが、旧制の福岡高等学校の教授も兼担して居られたので、桶井川べりのお家にも何度かお邪魔してお話を伺ったりした。

何しろ少人数のことだから、一人一人手を取って教えて頂くような雰囲気だったが、そのうち戦争が激しくなり、大学生への徴兵猶予の制度が廃止され、私たちは昭和十八年の十二月に所謂学徒出陣ということで、卒業論文も書かないまま大学を仮卒業することになり、兵隊に入っている翌年の秋に自動的に学士号授与が行われ、兵隊から帰って始めてそのことを知った様な次第であった。

私どもが仮卒業したあと、四宮先生はどういうお心持であったのか、同僚の先生方が引き止められるのを振り切る様にして、新設の満洲の建国大学に転任され、終戦を新東京で迎えられ、その年の十二月に彼地で亡くなられた。奥様とお嬢さまが引き揚げて来られて、その追悼の集りが福岡でもたれた。

また田中先生と新開先生は、戦争中の国策協力という理由で、国文学の高木市之助、国史学の竹岡勝也、ドイツ文学の佐藤通

次などの諸先生と一緒に、辞任されることになった。これは恐らく今の様に文学部が独立して居なくて、法・経学部と一緒に法文学部という組織だったことと関係があったのではなからうか。

それで、終戦後は、哲学・倫理学の先生方は一人も居られないということになり、美学の矢崎美盛先生が哲学の講義も担当された。そしてこの矢崎先生が、京城帝国大学から大分の田舎に引き揚げて農耕生活をして居られた田辺重三先生を説得して下さって、そのお蔭で田辺先生が再び教壇に立たれることになった。田辺先生は、時には来週は稲刈のため休講するなどと言われて大分に帰られることがあったが、常時は研究室に寝泊りして居られたので、学生はいつも先生の許におしかけて居た。この田辺先生が戦後の九州大学哲学、倫理学科の再建をはかり遂行して下さったのであって、先ず倫理学の滝沢克己先生が山口から、古代・中世哲学の長沢信寿先生が京都からお見えになり、その後、山本清幸、副島民雄、藤沢令夫、今道友信、黒田亘の諸先生方がお出で下され、哲学・倫理学科の講座が完全に充実されていくことになる。

ところが、本九州大学哲学会の発足後暫くして、昭和四十三年の米軍機の墜落事故以降、本学での学生紛争が強まり、その渦中で鬼頭英一先生の自死、滝沢先生の抗議辞職、それに引き続いて森田良紀先生の転出という事態が起り、それらに関連し

記念号に寄せて

て学生の中からも本会からの脱会ということも続き、その後遺症は今も完全には癒え切つてはいない。しかし、現在の諸先生方を始め、関係各位の御努力によつて、二十五周年の記念号を出すに至つたことは喜びに堪えない。回想して感謝するとともに、今後の発展を祈りたい。

昭和十九年九州帝国大学  
法文学部（哲学専攻）卒業  
業・第一経済大学教授・  
九州大学名誉教授